

## 自然法爾 仏の力で仏になる

問

富山県

富田つや

拜啓 私ことまだ先生とは一面識もない当年四十三歳の実に愚かな女であります。去月四日よりここ（高岡市宗玄病院）に入院いたしましたのがご縁となりまして、深川先生（東京、女子医専時代より団員深川久子様）から光明誌をお貸し与えください、まことに熱烈なお育てのほど深く感謝いたします。つきましては私こと永年お聞かせにあずかりましたが、初めはたのむ一念、信じた相が心配になり、計らいつづけてまいりました。その中に自分の信じた、たのんだは間に合わぬと聞かされ、ひたすら称名念仏（いやいや思いついた時だけです）しておりましたが、本年五月ごろから胃下垂症にかかり、六月二十日、床の中で正信偈の解釈四五回くり返しているうちに、ふとこれまでちよつとも気づかなかつたものに気がつき、同時にこれまで聞いていても寸分分らずにいたこともおいおいと味わいがとれてきました。すべてが方向が転じて、ものの見方もこれまでとは打って変わってまいりました、それで自分ながら不思議に思い、これが救われたかと思つていましたところが、御誌第十三巻八号より九号まで甲乙にわけてお話し下されたのを読みまして、これまでのすべてが、自分の胸の上におきる一切をすつかりえぐり抜かれていくようで、何事もない、念仏するよりほかに道はないと、念仏して見ますものの、いつしか心は散り、どうすればよいのかと、何が何やらさつぱり分かりませず、今日一日が永劫のびゆく未来なることが分かれば因果の道理が恐ろしく、それなら悪いことはすまいといよいよ実行にかかろうとすればぐらぐらと破れ、これではならぬと歌つて見ても、やつぱり破れ、何という愚かさでありましょうかと、夜眠れぬつれづれに考えても、よい思案も工夫もできませず、ただ身も心も苦しむばかりであります。人がすんなりと念仏申しいられると、私ばかりなぜこんなにこせこせとはからの止められぬ愚痴な奴であろうかと悲しくなります。『煩惱具足の凡夫火宅無常の世界は、よろずのことみなもてそらごとたわごとまことあることなきに念仏のみぞまことにておわします。』と聞けば、ただいまのこころのままにて念仏申しているだけが真実かとも思いますが、それだけでは満たされないものがありまして、どうにもなりません。友同行に話しますと、善知識がかけていては何にもならぬと言われます。本を見ても、善知識に会っていないゆえ、聖人が法然上人にすかされまいらせてというはつきりした善知識がなくては間にあわぬと言われます。すると私の心の奥に、何をいつまでむだむだ言うているか、有ればあるまま無ければないまま、汝念仏するだけでこの弥陀に助けられてくれよと仰せられます。その下からいやいやまだ本物ではない、人がかれこれ言うたぐらいで、考えなおしをするようではとてもだめだという考えがむくむく起きます。これはいっただうどうしたらいいのでしょうか。どこまでも身のほど知らぬ大バカ者であります。どうしてこうまでひねくれたおかしな心中であります。よいことをしようとする時、いつの間にか相手に傷つけわが身も墮ちることに気づきながら、その場になる

と破れてしまい、後悔先にたたぬ破目に落ち入ります。まことになんと言つてよいか、じつにお恥ずかしい者でございます。なにとぞ明らかに得心の行くようお教えくださいませ。伏してお願ひいたします。……………

答

お手紙くり返しくり返し拝見いたしました。よくよくお苦しみのごようすがはつきり見えます。まずそのご熱心な求道態度に敬意を表します。

いくらからはからつてもはからつても、いよいよ出てくるものは氣に入らぬものばかり、棄てたと思つても出てくるものは自力ばかり、多くの同行たちがはいつていく型の中に入りこんで、動きもすごきもとれなくなつていられるようすがはつきりと知らされます。以下数項にわけてお話し申します。

善知識

だれが善知識であるのかそれはわからぬことです。ですが、手紙ではとても徹底いたしませぬ。御地方にもだれか徹底した方があるはずです。その方について徹底するまでお聞きなさい。甲を聞きかじり、乙を去り、丙に渡り歩くことは、自分に忠実なゆえんでありません。それは病人が主治医をかえるようなもので、疑い晴れるまで一人のお方にお聞きなさい。

如来はましますのですか。どうですか。如来ましませば、如来は生きてはたらいています。無量寿、無量光の尽十方無碍光如来は、あなたの上よりほかにどこにはたらいきましよう。如来に直面して、その正座を一步も去らず、必死になつてその久遠の願心をお聞きなさい。

「汝念仏するだけでこの弥陀に助けられてくれよ。」と仰せられます。またその下から「いやいや本物ではない。」とは何のことです。あなたの如来は力のない、活きたか死んだかわからない如来ですね、あなたの思い一つで出たりひつこんだりする、あなたしだいでぐらつくお人形のような偶像ですね。もつとほんとの生きて通る願心におふれなさいませ。

念仏とは

次の『安心決定鈔』の一節を、幾度もくり返して拝読いたしましょう。

「うち任せて人の思える念仏は、『心には浄土の依正（依報、正報）ということ、依報は浄土、正報は如来のこと）をも観念し、口には名号を称うる時ばかり念仏はあり、念ぜず称えざる時は念仏はなし』と思えり、このくらの念仏ならば無為常住の念仏とはいひ難し、称うる時は出で来、称えざる時は失せなば、まことに無常轉變の念仏なり。『無為』とはなすことなしと書けり。小乗には『三無為』といえり、その中に『虚空無為』というは、虚空は失することもなく始めて出でくることもなし。天然なる理なり。大乘には真如法性等の常住不変の理を無為と談ずるなり。序題門に『法身常住比若虚空』と釈せらるるも、彼の国の常住の益をあらわすなり。ゆえに極樂を『無為常住の国』というは凡夫のなすによりて失せもし出できもすることのなきなり。念仏

三昧もまたかくのごとし。衆生念ずればとてはじめて出でき、忘るればとて失する法にあらず、よくよくこの理を心得べきなり。」

如来および浄土、念仏を虚空にたとえてあります。衆生念じたからとてはじめて出てくるのでもなく衆生忘るればとてなくなるのでもないところの、如来を念じ、浄土を憶うのが念仏です。念仏とは、あなたが聖なるものをつくりだすのでもなく、生み出すのでもなく、わずかそれに添えるのでもなく、それ自身独立自全な大善であり、大行であり、根本真実であります。念仏とはあなたのはからいで、如来をよびさます営みではなくて、如来があなたをよびさまし救う如来の働きにほかなりません。

添えられぬものに添え、足すことのできないものに足し、ごま化すことのできないものをごま化し、化粧によつて偽ることのできぬものを、『たのむ一念』とか『信の相』とかで偽つたり、正信偈の講釈を読んで変わらぬものを変わつたと考えたり、どこまでも浮身をやつしていられるのです。なぜもつと本気になって、真実なるものに直面しないのですか。

「棄てよ棄てよ一切を棄てよ。」

棄てようとするはからいも棄てよ。

棄てたと思うはからいも棄てよ！」

でも棄てられませぬ。

それはなぜでしょうか。

歸命とは

棄てようとするれば、それがはからいであり、たのもうとすれば、信じようとするれば、一切がはからいである。いつたいこれはどうしたことなのか、

——如来ぬきの仕事だからです。

「その名号を聞く」とは何のことか。

添えられもせず、なくすることも、出すことも、あなたによつてビクともせぬ、永遠に、厳然として独立の、如来の願心を聞こうではないか。

至心信樂欲生と立てた本願全体が、南無阿弥陀仏の六字の仏。

南無阿弥陀仏それ自身が、疑い晴れた大信心。

如来の願海が、そのまま金剛不壊の大信海。

やるのとるのといらぬ自力は、高慢邪見の悪魔の仕業。

久遠の迷心にひきまわされて、

如来の大信そのままが私の信とわからぬあなた、

もつともつと徹底的におやりなさい。

まことがまことと知れてきたら、迷いが迷いとわかります。

墨は墨とわかればよし、雪は雪とわかればよい。

如来の光に変わるのではなくて、変わらぬ私の色に咲く。

善人こそと呼ばれるかと思いのほか、悪人正機の深い慈悲。

大便を土に埋めておけば消えてなくなる。

消えたというても無くなったのではない。土の力で土になる。「転悪成徳」悪をばなくするのでなく、転じて仏の徳にする。煩惱を転じて仏となす力は、ただ仏の中にある。そうです、土の力で土に転ずる。仏の力で仏になる。真実の帰命とは、この願力のままに念仏すること、独立自全の念仏をそのままにいただくことであります。聖人の自然法爾の宗教というのがそれであります。ご不審が出ましたらお申し越しく下さい。